

約数の個数

さかもと しげる
坂本 茂

$(1+a_1)(1+a_2)\cdots(1+a_m)$ の展開を考えると

$$1 + \sum_{i=1}^m a_i + \sum_{i_1 < i_2} a_{i_1} a_{i_2} + \cdots \\ + \sum_{i_1 < i_2 < \cdots < i_m} a_{i_1} a_{i_2} \cdots a_{i_m}$$

となる。ここで \sum の i_j ($j=1, 2, \dots, m$) は $1 \leq i_1 < i_2 < \cdots < i_n \leq m$ となるようなものの総和である。したがって $(a_i = -a_i$ のときの場合も一緒に書くと)

$$\prod_{i=1}^m (1 \pm a_i) = 1 + \sum_{k=1}^m \left\{ (\pm 1)^{k+1} \sum_{i_1 < i_2 < \cdots < i_k} \prod_{j=1}^k a_{i_j} \right\}$$

と書ける。たとえば、 $1 \leq i_1 < i_2 < \cdots < i_k \leq m$ についての総和 $\sum 1$ は、 m 個から k 個とったものの組合せの数だけ 1 を加えることであるから、 ${}_m C_k$ である。よって、 $a_i = a$ ($i=1, \dots, m$) ならば 2 項定理

$$(1+a)^m = 1 + \sum_{k=1}^m {}_m C_k a^k = \sum_{k=0}^m {}_m C_k a^k$$

を得る。

p, q が素数なら p, p^k, pq の約数の個数はそれぞれ $1, p^k-1, p+q-1$ である。 a の約数に素数が p_1, p_2, \dots, p_m の m 個あったとする。 a 以内の p_i の倍数の集合を S_i とすると、 a の約数の個数は $n\left(\bigcup_{i=1}^m S_i\right)$ である。これは

$$n\left(\bigcup_{i=1}^m S_i\right) = \sum_{i=1}^m n(S_i) - \sum_{i_1 < i_2} n(S_{i_1} \cap S_{i_2}) \\ + \sum_{i_1 < i_2 < i_3} n(S_{i_1} \cap S_{i_2} \cap S_{i_3}) - \cdots \\ = \sum_{k=1}^m \left\{ (-1)^{k+1} \sum_{i_1 < i_2 < \cdots < i_k} n\left(\bigcap_{j=1}^k S_{i_j}\right) \right\}$$

となる。ここで

$$n(S_i) = \frac{a}{p_i}, \quad n(S_1 \cap S_2) = \frac{a}{p_1 p_2},$$

$$n\left(\bigcap_{i=1}^k S_{i_j}\right) = \frac{a}{p_{i_1} p_{i_2} \cdots p_{i_k}}$$

であるから、約数の個数は

$$\sum_{k=1}^m (-1)^{k+1} \sum_{i_1 < i_2 < \cdots < i_k} a \prod_{j=1}^k \frac{1}{p_{i_j}}$$

と書けるから、次のようになる。

$$n\left(\bigcup_{i=1}^m S_i\right) = a \left\{ \prod_{i=1}^m \left(1 - \frac{1}{p_i}\right) - 1 \right\}$$

ここで a 以内の数で a と互いに素である数の個数を $\varphi(a)$ で表すことにする。たとえば、 p, q が素数なら

$$\varphi(p) = p-1, \quad \varphi(p^k) = p^k - p^{k-1},$$

$$\varphi(pq) = pq - p - q + 1$$

である。約数でないものの数が $\varphi(a)$ であるから

$$\varphi(a) = a - n\left(\bigcup_{i=1}^m S_i\right) = a \prod_{i=1}^m \left(1 - \frac{1}{p_i}\right)$$

となる。一般に整数は素数 p_i を用いて $a = p_1^{a_1} p_2^{a_2} \cdots p_m^{a_m}$ と書け、

$$\varphi(a) = a \left(1 - \frac{1}{p_1}\right) \left(1 - \frac{1}{p_2}\right) \cdots \left(1 - \frac{1}{p_m}\right)$$

である。たとえば

$$\varphi(p) = p \left(1 - \frac{1}{p}\right), \quad \varphi(p^k) = p^k \left(1 - \frac{1}{p}\right),$$

$$\varphi(pq) = pq \left(1 - \frac{1}{p}\right) \left(1 - \frac{1}{q}\right)$$

である。また、式から $\varphi(ab) = \varphi(a)\varphi(b)$ がただちに分かる。

s より小さくて s と互いに素な $\varphi(s)$ 個の数を

$$t_1, t_2, \dots, t_{\varphi(s)}$$

とする。これらの 1 つを a とすると

$$a^{t_1}, a^{t_2}, \dots, a^{t_{\varphi(s)}}$$

はどの 2 つも m を法として合同ではない。もし $x t_i \equiv x t_j \pmod{s}$ とすると、 $a(t_i - t_j) \equiv 0 \pmod{s}$ で $a \not\equiv 0 \pmod{s}$ より $t_i \equiv t_j$ となり矛盾である。よって

$$t_1 t_2 \cdots t_{\varphi(s)} \equiv t_{\varphi(s)} a^{\varphi(s)}$$

である。したがって

$$a^{\varphi(s)} \equiv 1 \pmod{s}$$

(a と s は互いに素である) $s = p$ が素数なら

$$\varphi(s) = p-1 \text{ で}$$

$$a^{p-1} \equiv 1 \pmod{p}$$

である (フェルマの定理)。

(東京都立小平高等学校)